

うみ しょうがっこう

海の小学校

ぶん あまんきみこ
え いたうえみ



日にちよう日びと いうのに、

ヒロシは、あさから ひとりぼっち。

とうさんは、ようじが できて かいしゃに いき、

かあさんは いもうとの チカと、

ようちえんの しょくじかいに にかけて しまった。



「つまんないな」
こう つぶやいた とき、でんわが
なりだした。



じゅわきを 耳みみに あてると、タミオおじさんの こえ。

「やあ、ヒロくん。いま、ひとりだろう？」

いきなり 言いわれたので、

ヒロシは びっくりして ききかえした。

「どうして わかるの？」

「そりゃ、かあさんに きいた ばかりなもの」

——なあんだ。それなら わかるはず。

おじさんは、かあさんの おとうとだ。

ちかくの マンションの 五ごかいで、くらしている。



「ぼくは いまから、
うみの小学校しょうがっこうの ピアノを みに いく。
ヒロくん、じよしゅで いかないか」

「えい。さうや ささる。」



おじさんは、

ピアノの ちょうりつし。

じぶんの ことを

「ピアノいしゃ」と 言っている。

ピアノの音が せいかくに 出ない びょうきを
なおす おいしゃさん だって。

「いって いいから、でんわを したんだよ」

おじさんは、わらった。

「じゃあ、すぐ、ボロ車で 出かけるぞ」

ヒロシは ジャケットを きると、外に 出た。

かぎを かけていると、

おじさんの 車が 門の まえに とまった。



